

子どもたちの明日

Children, Our Future

2013年9月 **107号**

目次

カンボジアの伝統絹絵絣 1頁

ピダン展 - 阪急うめだ本店
絹織物にこめられたCYKの願い

「みんなで布チョッキン」 2頁

村人たちとつくれた「村の幼稚園」 3頁

みんなそろって開園式
子どもたちに適切な保育環境を

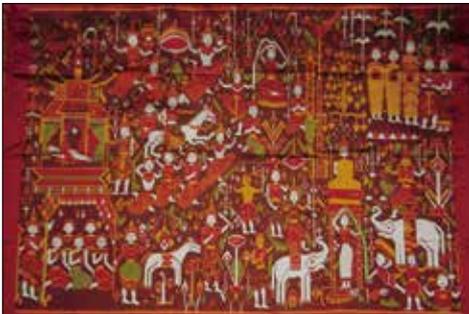
東日本大震災被災地支援の現況 4頁

おおぞら保育(東日本大震災被災地支援金)
支援のいま
保育施設の自主運営に向けて

ピダンを織る―草木染めで括った糸を織り機にかける準備。CYKトロピエンクラサンセンターにて。



シッタールタが悟りを開き、仏陀となる物語。CYK職員スーン・ミット作。所蔵：国立博物館、プノンペン



ピダン展出品作。1980年代、カンボジア難民キャンプのCYR織物技術訓練で制作されたピダン。



カンボジアの 伝統絹絵絣 - ピダン

仏教の国カンボジアでは、ピダンという絹絵絣の布が、人びとの信仰心を伝えて、昔から寺院の本堂や天蓋、あるいは仏像の背後に飾られてきました。「ピダン」とは、カンボジアのことばクメール語で天井を意味しており、その絵柄は仏教や土着の神々、ヒンズー教の影響が入り混じったモチーフで知られています。仏に奉納する気持ちをこめて織られた絵絣が、仏像を保護する覆いものであるように、人びともまた

仏に守られるように、との願いを込めてピダンを大切な儀式的折に飾ります。絵柄には仏教説話、神話、習俗、自然の現象や動物、植物、などのモチーフがあり、物語性が豊かです。

ピダン展 - 阪急うめだ本店

先月、関西、阪急うめだ本店で、「カンボジア伝統絹絵絣『ピダン』展」と題した展示会が開かれました。過酷な内戦を体験したカンボジアの復興と、人びとの強靱な生命力がテーマです。展示作品17点のうち、6点は、幼い難民を考える会(CYR)

60th Anniversary JAPAN and CAMBODIA.
日本・カンボジア友好60周年記念

カンボジア伝統絹絵絣
「ピダン」展

8月28日(水)~9月3日(火) 10時~18時(最終日は17時)

9階 アートステージ (展示販売・入場無料)

主催：カンボジア王国日本大使館、駐日カンボジア王国大使館
共催：認定NPO法人 幼い難民を考える会 協力：株式会社麗屋、ピダンプロジェクトチーム

及び同カンボジア事務所(CYK)で織られたものです。

幼い難民を考える会がタイの難民キャンプで、伝統織物技術の経験を活かして、女性たちに織物研修の道を開いたのは、32年前のことです。現在、カンボジア・タケオ州の村には、キャンプ時代の経験を生かして20年前にCYKが始め、発展させた織物研修センターがあります。地域村の研



左：草木染をする女性。織り糸は、樹皮、葉、実などカンボジアの天然素材を用いて、丹念に染めあげる。中央：ピダン展の様子。CYK 事務所長による展示解説。ピダンの奥深さが熱心に語られる。右：伝統柄ピダンが日本の帯に生まれ変わる。カンボジア織物研修センターで新たな色、柄の試作が続く。

修生は、括り、染め、整経、織り方を学んで、その作品を商品化するまでに腕をあげています。ここではピダンと呼ばれる、絹絵絣織りの技術も伝えられています。たまたま日本から訪れた人が、織物センター製品のすぐれた技術に目をとめ、帰国後、日本でその活用法を呼びかけました。その熱心な声に応える日本の支援者の力があって、カンボジアの精緻な織りものが、写真のような帯地として利用できる道が開かれたのです。日本とカンボジアの架け橋となった、絵絣や草木染の販売の成果は、試みが始まった

ばかりの今はまだ先が見えませんが、しかし、貧しい女性の収入の道を開き、伝統技術の復興・継承につとめる民間の団体とその事業を支える大勢の支援者、そしてその努力に応えようとする力は、展示会場を訪れた大勢の人びとの共感を呼び起こしたはずで、丁寧に見つめる人たちの間からは、「織物が仕上がるまでの長い道のりを、気の遠くなる思いで見た」、「宗教画を絵絣にする手間に、深い信仰心を感じた」、「日々のせわしさを忘れていた大切なものが、カンボジアの暮らしにはある」などの声があがりました。

絹織物にこめられた CYK の願い

この機会に、豊かなカンボジア染織文化を理解しながら、「幼い難民を考える会」が模索する、絹絵絣ピダンの復元や、新しい作品制作への道を固めたいと考えています。その上で、私たちの最大の願い、内戦後も立ち遅れ続ける貧しい環境のなかで、教育や技能がなく収入源を見出せない女性たちの暮らしを支える道、織物研修センターを機能させること。そして地域の人たちと共に、幼い子どもたちが貧しさの悪循環に陥ることなく育ち、学べる「子どもたちの明日」への道をつくることです。

みんなで「布チョッキン」

カンボジアの首都プノンペンには、外国からの投機熱が高まり、高層ビルが並び華やかな街に変わりつつあります。貧富の差の激しさは、現金収入を求めて農村から移ってくる人たちと、裕福になった人たちの暮らしぶりをみればわかります。都市部では技能や知識を持たない人たちが働ける場所は少なく、日雇い労働者はぎりぎりの生活をしています。

写真は、プノンペン国際空港近くにあるトロピエンスバイ小学校です。この地域には、開発が進む中心部にすんでいた大勢の貧しい人たちが、強制的に立ち退かされて住んでいます。掘立て小屋のような住まいが並び、トイレや水道はなく、住民は水をカメに溜めて使います。

この小学校には5歳児の幼稚園クラスがあります。写真の女性たちはその子どもたちの保護者です。日本のたくさん

の支援者の手で広がりを見せる「みんなで布チョッキン」の活動は、これらの人たちの手による作業をすすめるためでもあるのです。写真の二人は布をボールに仕上げているところです。女性がこの作業で得られる収入を確保して作業が続けられるようにと、CYKのカンボジア事務所職員が針や糸、綿、秤を車で届けます。なかでも特に貧しいとされる保護者9名は、針と糸の使い方や、秤による綿の量の計り方を習い、届けられた布を縫っています。ボールが仕上がると布チョッキン募金から、その場で作業の報酬が支払われます。この貴重な現金収入を受けるとき、お母さんたちの間に笑顔が広がります。縫い賃は子どもの小学校の給食費（CYRがお粥を支援）

や、家族のお米、薬代などとして使われます。作業に慣れてくると、ひとりが一回にボールを3、4個を縫えるようになります。

縫い上がった布ボールはカンボジアの各地の施設に届けられますが、それぞれの地域でたくさんの幼い子どもたちが、ボールが届くのを楽しみに待っています。

※日本で集めて裁断した布をカンボジアに送り、現地でも人形とボールに仕上げているボランティアの活動。





村人たちとつくった「村の幼稚園」

みんなそろって開園式

カンボジア・タケオ州の三つの村で、村に初めてできた幼稚園の開園式がありました。8月19日、三つの村のうち、カンダール村にはまだ集会所がないので、子どもたちは研修をうけたばかりの先生の家に行ってきました。庭の木陰で開園式です。トロピエンクロライン村では、新しく立て替えられた集会所が幼稚園です。おばあちゃんやお父さんに連れられてきた、緊張した子どもたちの顔が見えます。子どもたちと父兄、地区長や村長さん、村の役員たちがそろっての晴れの行事です。

どの幼稚園でも地区長さんは熱心に、幼児期の大切さ、小学校入学前の子どもたちの体験や学びが基礎になるのだと話していました。これらの開園は、地区長さんの強い働きかけとカンボジア事務所（CYK）

の支援がむすびついた結果です。三つの村では、それぞれ30名ほどの子どもたちが集まり、ゴザにすわって来賓を待っていました。地区長さんが「こんな簡単なつくりの幼稚園でも、将来は首相になる人が出るかもしれない。大事な場所だ。毎日、幼稚園に来るんだよ。」と呼びかけると、子どもたちは元気に答えます。プンプノム村では、子どもたちは慣れないながらも興味を持って、一緒に指遊びをする先生の動きを見守っていました。

子どもたちに適切な保育環境を

カンボジア政府が、就学前の幼児教育を普及させたいとする取り組みにもかかわらず、3歳から5歳児の就学前教育率は3割程度にとどまっています。どうすればより多くの子どもたちに適切な保育環境が整えられるのか、カンボジア事務所はここ数年、模索してきました。その結論のひとつが、安価で運営できる地域ぐるみの「村の幼稚園」でした。たとえ短時間の保育で

あっても、子どもたちが整えられた環境から受ける刺激と、その育つ力にはめざましいものがあります。

これまでの保育経験と実績をふまえた上で、CYKは2011年に二つの村の幼稚園を開きました。しかし、給料が払えない、子どもたちの出席率が低いという理由で運営が行き詰まりました。この体験をふまえて、新たに地域住民の力で運営する幼稚園についての条件を打ちしました。それは日本からの支援を最初の3年間に限り、保育所の先生の給与を生み出す仕組みを考え、4年目は地域運営に切り替える方法です。その結果、地域住民側に4年目を自主運営するとの意向を伝えてできたのが、先のタケオ州の三つの村の園です。

これからは、子どもたちにとって楽しい幼稚園活動がしっかり根付くよう、経過を見守りながら自主運営支援をつづけていきます。

事務局からのご報告

東日本大震災 被災地支援の現況

あおぞら保育支援の今

ご協力いただいた被災地支援募金については、2013年4月1日から7月12日までの間に31件、377,655円が寄せられています。ご支援ありがとうございます。基金の一部は宮城県多賀城市の「あおぞら保育園」の遊び場（デッキ）設置費として7月に30万円を寄付いたしました。トレーラーハウスでの保育が続くこの施設で、写真に見えるデッキがもっと広く使えるようになります。新園舎再建の後もデッキは遊び場として役立てられます。

保育施設の自主運営に向けて

福島原発事故処理の深刻な状況が報道されるいま、分断され、将来が見えない地域の問題は、子育てや保育につながる私たちの共通の関心事です。当会はこれからも保育関連の課題に目を配り、支援に生かせる



よう努力を続けます。震災発生以来、大勢の方々に被災地支援のためのご協力をいただいて、大規模支援が届き難い自主保育施設や仮設住宅を対象にした作業を続けてきました。おかげさまで、宮城県にある右記の4施設への支援（保育教材・遊具寄贈、人件費、環境整備費）が、それぞれの施設による自主運営が可能となったため、当会からの支援活動は2013年3月をもって終了したことをご報告いたします。

- ・のびる幼稚園（東松山市）
- ・キッズROOM おひさま（気仙沼市）
- ・ピッコロルーム（仙台市）
- ・託児スペースポルカ（仙台市）

上記以外の3施設・3団体への支援は継続いたします。みなさまのご協力にあつくお礼申し上げます。

イベント情報

10月22日(火)-27日(日) 10時-16時

祈りの絵紺・ピダンとメコンの布展

主催：東慶寺、ポンナレット、クロマニヨン 協力：CYR

場所：東慶寺ギャラリー 鎌倉市山ノ内1367

JR横須賀線「北鎌倉駅」徒歩4分

最終日16時半 特別企画 トーク&パーティー

話し手：米倉雪子（ピダンプロジェクトチーム）、江波戸玲子、中村夏実

11月8日(金),9日(土) 10時-18時

よみがえるカンボジア伝統絹絵紺 ピダン展・草木染織物展

場所：正光院 港区元麻布3-2-20

地下鉄日比谷線・大江戸線「六本木駅」徒歩10分

テレビ朝日通り麻布税務署前

8日18時 インド古典楽器演奏

演奏：サンギート・ミシュラ 場所：正光院本堂

12月19日(木) 18時

グレゴリオ聖歌による降誕前晩のミサと小コンサート 幼い難民を考える会のために

主催：CANTATE DOMINO

場所：聖心女子大学聖堂 渋谷区広尾4-3-1

地下鉄日比谷線「広尾駅2番出口」徒歩3分

カンボジア手織り布ショップ

ラタナ



幼い難民を考える会事務所でピダンほかカンボジアの絹製品をご覧くださいませ。ぜひお越しください。

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CYR CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日 107号

発行日：2013年9月25日 発行人：深水 正勝

特定非営利活動法人 幼い難民を考える会

〒112-0013 東京都文京区音羽1-10-4 池田ビル3F

TEL：03-3943-6971 FAX：03-3943-6973

E-mail：info@cyr.or.jp URL：http://www.cyr.or.jp

幼い難民を考える会（CYR）は認定NPO法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。